

町内の道端で、世の中の移り変りを見つめている道祖神、山道の草の茂みのなかにみられる馬頭観音、山の神、水神、庚申塔等々の前に立ちどまつたとき、その姿に遠い昔をふりかえり、自然と頭が下がり両手をあわせることができるのでないでしょうか。

調査に歩きながらこのような石造物を建立した背景について考えると、これらの石造物は凶作、疫病など人間の命を脅かした敵に対するひたすら神仏に祈り、生命の安全を願うとともに亡くなつた人たちの靈を慰めた先人たちの思いを物語つてゐる。多くの人が石造物に関心をもち、祖先が残した文化遺産を愛護されることを願つています。

石造物の中の道祖神

調査協力員 中 樋 令 人

市史編さんの協力員として、石造物調査にかかわり、終つた今でも路づての石祠・石仏がなんとなく気になります。細い路地、古い道筋にある石祠・石仏こそに人々の願いがこめられ、それぞれの思ひが伝えられているからだと思います。

なかでも、道祖神は「ミチ」を司る神として、その役目を果たしながら集落の成り立ちや、生活文化の流入の方向を教えてくれる石造物と思います。形は文字塔であり、石祠であり、丸石であつたりですが、側面や裏面に刻まれた「中之切」とか「上之組」の文字を見ると、その集落の大きさと方向を知ることができ、次の集落とのつながりが見えてきます。

記・紀神話などから道祖神を大別すると四つの顔があると思います。一つは猿田彦に見られる、道案内の神、二つには塞の神としての塞の信仰、三つは八衢の神といわれ、四達に通じる四つ辻でのト占の信仰と思われます。

最後に久那土・岐神は、伊弉諾尊が黄泉国から逃げ帰り、禊祓をした時投げ捨てた杖から化生した神といわれていますが、「クナド」「フナド」は道祖神の古い呼び名で、カミ→カム→クマ→クムの古形につながる言葉です。クムとクマとは「クム」の方が古く、クム処、クナグ処を意味し、隠れた処、見えない処の聖（性）域で、呪的行為の大切な場所を指します。又、「ミチ」は、邪靈も含めて「チ」の靈を運ぶ道で、虜囚の首を携えて進む字形（導）の初文とされています。